第９回 校長会議あいさつ

R8.11.17　稲垣

海辺を散歩していると、穏やかな入り江で、日本で冬を越す渡り鳥がくつろいでいます。かと思えば、高くなった空を先を急いでいる鳥がいたりします。8日未明の地震には、ついに来たかと一瞬肝を冷やしました。揺れのピークが過ぎてから緊急地震速報が響いたのは、震源地が近かったためでしょうか。また、地盤の固い地域の方が揺れが大きかったということにも驚かされました。いずれにせよ、あの地震が放課に起きていたら、さらに登下校中だったらと考えると安穏とはしていられません。校内での避難訓練は、これまでさまざまな想定で充実してきましたが、今後は、保護者はもちろん地域の方たちの協力も得て、よりリアルな防災訓練によって、児童生徒の安全確保に努める必要があります。

本日は、学校の働き方改革についてまとめてみます。本市においても、事務の効率化や会議の精選、書類の簡略化、そして行事の見直し等々、できる限り教育の質を維持できるように、子どもたちにとって遠い所から手を付けてきました。国は当初、働き方改革の目的として「教員がゆとりをもって児童生徒と向き合えるように」という趣旨を掲げていましたが、それはいつの間にか後退してしまい、最近は、勤務時間外労働時間と教職調整額の整合を図ることに注力しているように感じられます。

かつて多くの担任が発行していた学級通信の中では、学級全員の子どもが登場するように配慮して、一人一人の子どもを褒めたり、クラスの仲間意識を育んでいました。それは生徒指導上の課題に対して、未然防止の核となる自己肯定感や集団所属感の醸成に大きく寄与していました。しかし、その学級通信は影を潜め、学年通信がやっとという状況に代わってきました。また、会話による自己表現の苦手な子どもの気持ちは、生活日記等で汲み取っていましたが、今の担任たちにその余裕はありません。

勤務時間外労働時間を縮減するために、部活動に白羽の矢が当たりました。国が「地域移行」の看板を高々と掲げた改革当初、「部活動の伝統的な価値を地域が継承する」と提唱されましたが、これについては、部活動の本質を熟知したベテラン指導者からは、疑問の声がありました。「野球を教えるのではなく、野球で教える」姿勢や、生徒たちの中学校生活を丸ごと把握した上で、「名選手である前に良き中学生であれ」と謳った教師たちの想いは継承されるのでしょうか。次期学習指導要領において、「部活動は学校教育の一環」という文言が残るという情報もありますが、生徒たちに不利益が及ばないように義務教育の方向性を見据え、学校の在り方を模索していきたいと思います。